

[成果情報名] カンキツ新品種「西南のひかり」の特性

[要 約] 「西南のひかり」は(独)果樹研究所が育成し、12月に販売可能な新品種である。糖度が高く食味が優れることから、ウンシュウミカンで糖度が上がりにくい地域において補助的品種としての利用が考えられる。

[キーワード] カンキツ、中晩柑、新品種、西南のひかり、口之津26号

[担 当] 静岡農林技研・伊農研セ

[連絡先] 電話 0557-95-2341、電子メール agriminamiizu@pref.shizuoka.lg.jp

[区 分] 果樹

[分 類] 技術・普及

[背景・ねらい]

県内カンキツ産地から有利販売できる新品種が求められており、(独)果樹研究所等で育成された品種の中から、糖度が高く品質が優れた県内産地の気象条件に合った新品種を選抜する。

[成果の内容・特徴]

1. 「西南のひかり(系統名:口之津26号)」は果樹研究所カンキツ研究口之津拠点が、(アソール×興津早生)×陽香)の交配により育成したマンダリンタイプのカンキツである。
2. 樹勢は弱く、樹姿は円形、枝梢は密に発生し、トゲの発生がやや多いため、管理作業の支障となりやすい。結実性は良好であるが、樹冠の拡大が緩慢である。かいよう病は軽度の発生が認められる(第1表、第2表)。
3. 平均果実重は130g程度、果形は果形指数140程度と扁円形である。果皮はやや滑らかで果皮色は橙色である。果皮は2mm程度で剥皮のしやすさはやや容易である。浮皮の発生は少なく、す上がりは見られない(第2表、第1図)。
4. じょうのう膜はやや薄くそのまま食べられ、果汁量はやや多い。糖度は13.5度以上と高く、食味は良好である。12月に酸含量が1%程度となり、年内に食べられるが、1月まで樹上におくことによりBrixがさらに上昇する。含核数は2個程度と少ない(第3表、第2図)。

[成果の活用面・留意点]

1. 伊豆地域の火山灰土壌など、糖度が上がりにくい地域において、ウンシュウミカンの補助品種として有望である。
2. 樹勢が弱く、樹冠の拡大が緩慢なため、有機物の施用やたこつぼ掘り等の土壌改良や適切な肥培管理が必要である。
3. 枝梢が密に発生し、トゲの発生もやや多いので、間引きせん定を行い栽培管理を容易にするように努めるとともに、防風樹の整備やネットの設置により風ずれの防止を図る。

[具体的データ]

第1表 樹の特性および病害の発生程度

調査年度	樹性 樹姿	樹性 樹勢	樹冠容積 m ³	枝梢粗密	枝梢のトゲ 多少・長さ	開花 萌芽期	着花 盛期	1樹当り 1m ³ の収量	後期 1m ³ の収量	裂果 落果	病害	
						月半旬	月半旬	kg/樹	kg/m ³			
2003	円	弱	1.2	中	竹多・中	4.1	5.4	中	1.7	1.1	無	無
2004	円	弱	1.7	密	中・竹短	3.5	5.1	中	2.0	2.0	無	無
2005	円	弱	1.6	密	竹多・短	4.2	5.3	多	6.5	3.4	無	無
2006	円	弱	1.6	密	竹多・短	4.1	5.5	竹少	1.1	0.6	無	無

第2表 果実の特性

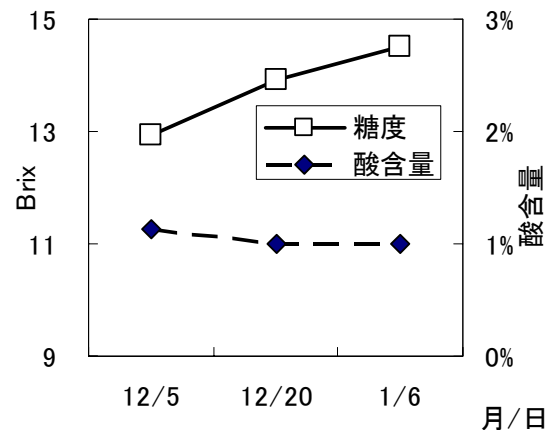
調査年度	着色期 始	着色期 完全	平均果重 g	果形 指数	果皮 色	果皮 粗滑	果皮 厚さ	浮皮 剥皮性	す上がり	かいよ う病	そう か病	
	月半旬	月半旬					mm					
2003	10.3	11.5	132	139	橙	竹滑	2.6	易	軽	無	中	無
2004	10.5	11.4	149	143	橙	中	2.1	竹易	無	無	軽	無
2005	10.5	11.5	116	143	橙	中	3.2	竹易	無	無	軽	無
2006	10.6	11.6	119	140	橙	竹滑	2.3	竹易	無	無	軽	無

第3表 果実品質

調査年度	調査 月日	分析 果実重	果肉 歩合	じょうの 厚さ	果汁 量	Brix	酸含量	含核数		
	月・日	g	%				%	完全種子	不完全種子	無核果率
										%
2003	12.18	136	78.0	竹薄	中	13.7	0.96	1.7	0.2	11.1
2004	12.19	154	85.0	竹薄	中	13.8	0.89	0.2	0	88.9
2005	12.20	115	82.6	竹薄	竹多	13.9	1.00	1.0	0.2	6.7
2006	12.20	146	82.0	竹薄	竹多	13.9	1.29	2.3	1.7	0



第1図 「西南のひかり」の果実



第2図「西南のひかり」の Brix および酸含量の推移(2005/12/5~2006/1/6)

[その他]

研究課題名：新しい静岡適応型果樹品種の選抜

予算区分：国庫委託

研究期間：2001～2010年度

研究担当者：荒木勇二